

NEWS CAST

August 2006
No. 86

日本がん疫学研究会

日本がん疫学研究会代表幹事に就任して

山口直人 (東京女子医科大学)



2006～2008年の日本がん疫学研究会(以下、研究会)代表幹事を仰せつかりました。このような大役は先輩の仕事と考えていましたので「私もそんなに年取ったか」という驚きと責任の大きさを痛感しています。

私が始めて取り組んだがん疫学研究は職業性膀胱がんの疫学研究ですが、その研究成果を発表できたのが、九州大学倉恒教授が開催した研究会で30歳の頃でした。それから20年余りが過ぎましたが、私の研究生活はいつも研究会と共にあったと言っても過言ではありません。改めて思い返しますと、研究会は、先輩、同年代の仲間、そして若手の多くの先生方との出会いの場でした。生意気盛りの私を諫めて下さったのも研究会の先輩先生方ですし、駆け出しで自信がなかった研究を励ましてもらったのも研究会の先輩先生方でした。こんなにご恩がある研究会なのに私の方からはこれまでに何もお役に立つことがなかったことを今改めて実感しました。これからの2年間に微力ながら研究会をより充実したものにするには何ができるか考えてみました。

まず、研究会と他の学会、研究会との関係について、これからの方向性を考えてみたいと思います。日本癌学会のような巨大な学会とは違って、研究会のような小規模の学術団体には共通の目標や方法論を持った人達が集います。研究会を特徴づけるのは、対象とする疾患、共有する研究方法、そして実現を目指す目標ということになります。本研究会の会員の共通点は、がんという疾患を対象とし、疫学という研究方法を駆使して研究することで、目標は明確にはしていません。一方、過去何回かにわた

って学術集会を共催した日本がん予防学会は、がんという疾患の予防を目標とした団体で、方法論は限定していません。また、今年の学術集会を共催した日本がん分子疫学研究会は、研究方法を分子疫学に限定しているのが特徴で、本研究会との近縁性は非常に高いこととなります。日本疫学会は疫学という研究方法のみを共通点として集う団体です。このような特徴を簡単な表にまとめてみました。

団体名	対象疾患	研究方法	目標
日本がん疫学研究会	がん	疫学	—
日本がん予防学会	がん	—	予防
日本がん分子疫学研究会	がん	分子疫学	—
日本疫学会	—	疫学	—

当然ながら、対象疾患、研究方法、目標を絞り込めば、より共通性の高い人達の集う研究会となります。しかし、共通点を絞り込めば、集う人数は小規模になりますし、流動する研究の重点課題の変化に柔軟に対応してゆく力は弱くなります。逆に、共通性を緩いものとする、規模は大きくなりますが、集う会員の共通性は低くなり団結の維持は困難となるかも知れません。さて、我が研究会は、どのような方向性を持つべきでしょうか？今、会員全体で議論を尽くすことが求められています。もちろん、研究会を現状のままとして継続して運営してゆくというのも有力な選択肢です。そして年毎の学術集会を様々な学術団体と共催してゆくというも行き方のひとつです。

次に、研究会で会員同士が何を伝えあうかという点を考えてみたいと思います。もう一度自分の過去を振り返ってみますと、私が研究会で学んだのは、最新の研究方法だったことももちろんありましたが、もっと貴重だったのは、研究に対する姿勢とか、心意気といったものを学べたことでした。がん疫学へのこだわりとか、頑固に守り通したいもの、それは知性の領域というよりも感性の領域です。がんの罹患率に出生コホート効果があるように、がん疫学者にも世代ごとにユニークな共通点を持っているような気がしますが、そんなことを考えるのは私だけでしょうか。先輩、同年代、後輩のそれぞれが持っているこだわりをぶつけ合うこと、お互いの個性、違いを認め合い、切磋琢磨

磨することが重要です。先輩から学び、友人から学び、後輩から学ぶのは、かっこよく言えば、各人の生き様だと言えるかも知れません。これからの研究会の運営でも会員の連帯の強化を重視してゆきたいと思います。

最後に、2007年度に当番幹事として開催します学術集会をご案内します。来年は、日本がん予防学会(若林敬二会長)、日本がん分子疫学研究会(樋野興夫会長)との合同で開催すべく準備を進めています。テーマは「がん予防大会 in Tokyo 2007」、研究方法の違いの壁を乗り越えて、がん予防への「思い」で連帯する、そんな会にしたいと思います。昼間は、3つの会の会員がわが国のがん予防の将来性について情報交換と討議を紳士的に行う公的な会議、そして、夜の懇親会では、21世紀のがん予防の主導権を握るのは、動物実験か疫学か、ぜひ真剣勝負をしたいところです。また、同じ疫学の仲間同士でも、疫学の本道は何なのか、分子疫学以外の疫学はもう時代遅れなのか、こだわりをぶつけ合いたいと思います。申し遅れましたが、日時は2007年7月12-13日、場所は学術総合センター(東京都千代田区)です。多くの会員のみなさまのご参加をお待ちしております。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

**第29回がん疫学研究会
第7回日本がん分子疫学研究会
合同学術集会
—報告—**

第29回日本がん疫学研究会を終えて

第29回日本がん疫学研究会会長
秋葉澄伯(鹿児島大学)

第7回日本がん分子疫学研究会学術委員長
中地 敬(放射線影響研究所)

第29回日本がん疫学研究会ならびに第7回日本がん分子疫学研究会の合同学術集会を無事終えることができました。皆様のご参加とご協力に感謝いたします。今回は最初の合同学術集会の試みということもあり、ご参加をいただきました先生方には、戸惑われた点あるいはご不

自由をおかけした点多々あると思いますが、お許しいただきたいと思います。

二つの研究会は「ヒトがんの予防」という同じ目的を持っていますが、今回の合同学術集会を通して、共通した所また違う所がはっきりし、互いに学ぶ点あるいはそれぞれの会の独自性として互いに尊重すべき点が見えてきた感じがいたします。今回、会のスケジュールの都合により、ポスター&ディスカッションをEP、ME、JNTに分けさせていただきましたが、EPにもがん分子疫学研究会会員の先生の演題が入り、MEにもがん疫学研究会の演題が入っており、遺伝子多型やその他の生体指標を用いた研究は分子疫学分野というよりがん疫学の普遍的方法の一つとなった現実が見えました。また、がん疫学のシンポジウムIIではウイルス発がんのメカニズムも含めた発表と議論が行われ、分子疫学と疫学の区別がますますなくなったように思えます。

これから二つの研究会のあり方、方向性について多くの議論が行われることと思いますが、今回の合同学術研究会がその出発点となれば、会の世話役をさせていただきました者としてこれ以上の幸せはありません。

今回の会の参加者は110名でございました。多くの先生方にご参加をいただきましたことを改めて感謝申し上げます。また、この学術研究会が大過なく終了したのは、会の運営に携わりました多くの皆様のご協力によるもので、この場をかりまして深く御礼申し上げます。

**シンポジウムI(日本がん分子疫学主催)、
ポスター発表(日本がん分子疫学および
JOINT セッション)の報告**

秋山好光(東京医科歯科大学)

合同学術集会前半のシンポジウムIでは、日本がん分子疫学研究会主催で「ヒト発がん研究の生体指標;そのメカニズムと測定」と題し、林慎一(東北大学)、末岡榮三朗(佐賀大学)両先生の座長のもと、4名の発表が行われた。林奉権先生(放射線影響研究所)は「炎症関連指標と免疫学的加齢および発がんへの関与」をテーマとし、被爆者は被爆後20年内には血液系腫瘍、40年内には固形腫瘍、60年以上経過すると免疫系異常が起こりや

すいことを示した。また被爆線量と加齢との関連性、およびそれらの影響によるインターロイキンなどの炎症関連指標の増加が認められることを報告した。炎症関連指標に基づく免疫学的加齢および発がんとの関係の研究は、がん予防やゲノム研究において重要であると考えられた。楠洋一郎先生(放射線影響研究所)は「フローサイトメトリーによる生体マーカーの高度分析」について発表した。本法は高速高感度で客観的に個々の細胞を解析でき、末梢血リンパ球表面マーカーや体細胞突然変異の検出に優れていることが紹介された。この発表では被爆者と健常人を対象とし、被爆者ではナイーブ CD4(+)T 細胞は減少していたこと、GPA 遺伝子の体細胞突然変異の頻度が高いことを明らかにし、フローサイトメトリーががん分子疫学研究にも応用できることを示した。堺明子先生(岡山大学)は「ヒト DNA の高感度測定法及びその応用—腫瘍マーカーとしての血中遊離 DNA—」について、特にがんが増加している末梢血遊離 DNA を定量・定性的かつ迅速的に測定するシステムを紹介した。また遊離 DNA 値測定には血漿が適しており、微量な DNA 測定には GAPDH よりも Alu 配列を用いた方が有効であることを明らかにした。この方法により、肺がん、肝がん等では健常人と比べて有意な DNA 値上昇が検出され、末梢血遊離 DNA 解析はがんのリスク評価として応用できることを示した。柳澤聖先生(名古屋大学)は「プロテオミクスの疫学への応用」で、マトリクス支援レーザー脱離イオン化質量分析器(MALDI MS)を応用した肺がん組織の網羅的タンパク発現プロファイル解析について紹介した。この研究により肺がん患者の予後に密接に関わる複数のタンパクが同定され、MALDI MS を用いた解析は臨床試料への応用ばかりでなく、がんの分子病態解明、予防や診断、治療法の開発に向けた分子標的の同定にも有用であることを報告した。シンポジウム I の内容は、がんの分子生物学的研究のみならず、コーホート研究や今後のがんの早期発見および予防にも大きく役立つ内容であった。

日本がん分子疫学研究会関連のポスター発表は 18 題であり、いずれもがんにおける遺伝子またはタンパクレベルでの検討が行われており、がん分子疫学的な色の濃い内容であった。これらの成果は臨床的にも大いに役立つ成果と考えられる。中でも、原爆被害者に発生した腫瘍における遺伝子異常の解析が 4 題、タイ国東北部の胆管がんの分子生物学的検討が 2 題など地域に特有のがんの解析が特徴的であった。また合同学術集会として意義深い分子疫学と疫学の両方が一緒に討論する JOINT

セッションとして、8 題のポスター発表が行われた。5 題は乳がん、前立腺がんまたは肺がんに関連する内容で、特にがんリスク評価において疫学的に充分検討された内容であった。加えてその成果はタンパクや遺伝子レベルでも裏付けされていた。また、がん疫学研究会招待発表 3 題として低周波電磁場と小児白血病、携帯電話の使用と脳腫瘍リスクに関する研究、および原子力発電施設等の放射線業務従事者を対象とした疫学調査の報告があり、主に方法論的な点を中心に発表された。JOINT ポスター発表は、両方の研究会会員が理解できた発表内容でもあり、活発な質疑応答が交わされた。また、両研究会がそれぞれ専門的な内容を発表し、かつ討論できたことは、がん分子疫学側もがん疫学側においても新しい知見が得られ、今後の各会員の研究に大きく貢献できると考えられた。

特別講演、シンポジウム II、および、日本がん疫学研究会関連のポスター発表に関する報告

森 満(札幌医科大学)

秋葉 澄伯(鹿児島大学)

特別講演「天寿がん、やっところがん、くずれがん」は、(財)癌研究癌研究所名誉所長の北川知行先生が高齢化社会におけるがん予防、がん治療について鋭い一石を投じたものであった。天寿がんは、さしたる苦痛なしにあたかも天寿を全うし死に至るがんと定義されるが、その割合が今やがん全体の 2.4%、85 歳以上者のがんの 28%に達しているという。それに準じる「準天寿がん」ややっところがんに成長する「やっところがん」などを含めるとさらに大きな割合になると推定される。そして、このようながんのグループは一般的ながんと区別されるべきであるという提案は、がんの個別的予防や個別的治療の観点からも注目される。今後は天寿がんの疫学的、分子生物学的、および、病理形態学的特徴を明らかにしてゆくことによって、不必要な治療をしなくても済むがんというものと同定されるようになるかも知れない。いや、がん治療の目標ががんの排除ではなく、がんの特徴をいかに「天寿がん」へ近づけるかという発想に変わっていくのではないかと、とも考えられた。このような北川博士の講演内容は、がん治療やがん研究に携わるすべての方々に聞いてい

ただきたいと思った。

シンポジウムⅡは、ウイルス関連がんの疫学と題し、座長(田島和雄 愛知県がんセンター研究所所長)がウイルス関連がんの研究の現状と症例について展望をまとめた後、三人の演者が講演を行った。「免疫学的観点からみたヒトパピローマウイルス(HPV)感染と子宮頸癌」で笹川寿之博士は、高リスク型 HPV 感染は若い女性では比較的ありふれた感染で、HPV 初期感染の約 9 割は自然に排除され治癒し、残りの 1 割は持続感染化し、その中から子宮頸癌が発生すると考えられること、HPV 感染後、3-4 割で抗体が誘導されないが、ウイルスの排除には細胞性免疫がより重要で、HPV 感染後 HPV 特異的免疫が誘導された場合には自然治癒する可能性が明らかになりつつあること、CIN 患者の子宮頸部局所では Th2 活性が優位の状態にあるという報告が多いこと、などを指摘して、HPV 感染後、いかなる免疫応答が誘導され HPV はいかに免疫を回避するかは、発癌するかどうかを決定する一つの重要な要因と考えられる、と述べた。「ウイルス発癌と化学発癌の接点としての肝細胞癌の予防」で田中恵太郎博士は、わが国における肝細胞癌の約 7-8 割に C 型肝炎ウイルス(HCV)、2 割弱に B 型肝炎ウイルス(HBV)の持続感染が関与していること、HBV は感染した肝細胞の遺伝子に組み込まれ、産生される X 蛋白によるトランス活性化が発がん重要で、HCV では、感染肝細胞内で産生されるコア蛋白が発がんに関与する可能性があること、ウイルスによる発がんリスクが喫煙で上昇し、コーヒー飲用で低下する可能性があることなどを指摘した。「Epstein-Barr ウイルス関連胃がんの疫学」で郡山千早博士は、EBV 関連胃がんの病理学的、疫学的、ウイルス学的特徴をまとめ、南米での研究で、EBV oncoprotein がコードされていると疑われている領域の遺伝子多型の分布が胃がんと健常者の EBV で異なることを指摘した。

日本がん疫学研究会関連のポスター発表は 19 題であり、いずれも疫学的研究デザインがしっかりした演題で、内容も大変興味深い発表ばかりであった。そのうち 7 題は遺伝子多型のリスクを評価した発表であり、残りの演題の中でも 7 題は分子生物学的手法を用いてウイルス感染のがん罹患リスクを評価したり、生体指標を測定してがん罹患リスクを評価したりしたものであった。従って、今回演題を提出していただいた先生は、日本がん分子疫学研究会と合同の開催であることを意識したのだろうと考えられた。そして、少なからぬ演題ががん罹患における宿主の遺伝的要因と生活習慣などの環境要因との交互作用

を検討したものであった。遺伝的要因と環境要因とは無数の組合せができることから、どのような遺伝的要因と環境要因との交互作用に焦点を当てて研究するかという「テーマの選定」が今後は非常に重要になっていくと思われる。

★特別講演のスライドムービーはがん分子疫学研究会 HP (<http://www.aichi-med-u.ac.jp/jame/index.html>) で公開しています。

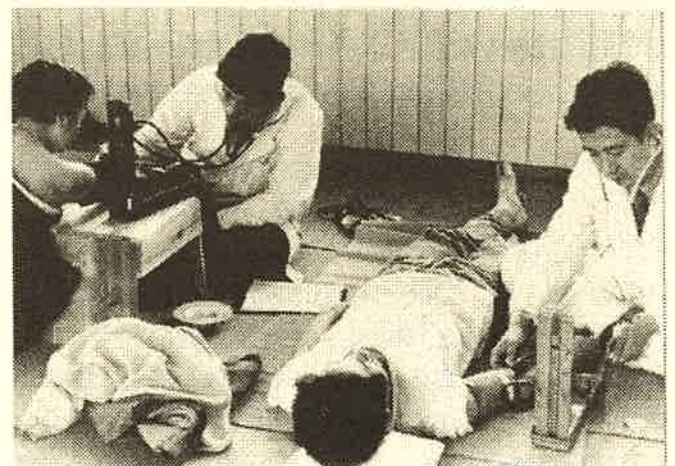
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

☆☆☆コホート便り☆☆☆

—久山町研究—

清原 裕
(九州大学大学院)

久山町研究は、一般住民における脳卒中の実態解明をめざして、1961 年に福岡県糟屋郡久山町の地域住民を対象として始まった疫学調査である。疫学調査の対象となった久山町は、研究当初人口約 6,500 人の都市近郊型の農村地域であった。この町が研究対象に選ばれた理由は、町人口の年齢・職業構成が日本全体の平均に近似していたこと、人口の流出入が小さかったこと(年平均 5%以内)、九州大学に近かったこと(約 10km)、そして町当局の全面的な協力がえられたことがあげられる。その後、隣接する福岡市の影響を緩やかに受けて都市化



1961 年の初回久山町住民健診の風景 (血圧測定)

が進み、最近では第1次産業(農林業)の従事者が5%まで減り、代わって第2次産業(工業)および第3次産業(サービス業)の従事者が大幅に増加した。人口も1,000人ほど増えたが、現在でも年齢・職業構成は日本の平均を維持している。

この研究が始まったきっかけは、1950年代の世界各国の脳卒中死亡率を比較した米国の疫学者 Goldberg と Kurland が、日本の脳卒中(とくに脳出血)死亡率が他の国に比べて群を抜いて高いことに注目し、日本人に脳卒中が多いのは人種や環境の差だけではなく、死亡統計の基となる死亡診断書を記載する際の、日本人医師の診断習慣に問題があることを示唆したことにある。当時、九州大学医学部第二内科を主宰していた勝木司馬之助教授はこの疑問を明らかにするために、特定の地域住民を対象に、その集団内における脳卒中死亡率とともにその病型頻度を正確に把握すべくこの研究を立案した。久山町研究のもう一つの目的は、日本人の脳卒中の要因を明らかにし、それを予防につなぐことにあった。そこで、疾病と要因の因果関係を究明するうえで最も精度の高い疫学的手法の一つとされる前向きコホート研究の手法を基本的な研究スタイルとした。さらに死因調査の正確性を期すために、死亡者を全例剖検することが研究の命題とされ、九州大学病理病態学(第一病理)および形態機能病理学(第二病理)の全面的な協力を得て研究が開始された。

研究初期の勝木教授の時代に、久山町剖検例の検討により地域住民では脳卒中の死亡率が最も高かったが、その中に占める脳出血の割合は死亡統計ほど高くないことが明らかとなった。その後、1971年に研究を引き継いだ尾前照雄教授は、解析の標的を脳卒中死亡から発症に広げ、その危険因子の解析に精力を注いだ。また、1973年の健診に自動分析器による血液生化学の多項目測定を導入しその後の健診スタイルを確立させた。1984年に研究を引き継いだ藤島正敏教授は、65歳以上の高齢住民を対象にした老年期認知症の疫学調査を開始するとともに、住民健診に75g経口糖負荷試験を導入し、久山町研究に新たな展開をもたらした。2001年6月に教室の主宰者が飯田三雄教授に交代し、標的疾患が脳卒中をはじめとする心血管病に加えて、消化管(胃癌)を中心とした悪性腫瘍に広がった。この間、研究室の主任研究者も廣田安夫、竹下司恭、上田一雄の3人の先生方から現在の私へ代替わりし、疫学の現場を支えてきた。

久山町研究では、1961年の追跡開始時より2年ごとに、1974年から5年ごとに40歳以上の全住民を対象に健診を繰り返して行っており、どの年の健診受診者もコホートとして追跡しているが、とくに1961年、1974年、1988年、2002年の健診受診者をそれぞれ第1集団、第2集団、第3集団、第4集団と命名して主な解析対象としている。この研究の特筆すべきことは、健診受診率が高いこと(40歳以上人口の78%~90%)、追跡率が99%以上で脱落例がほとんどないこと、心血管病発症例を研究スタッフが往診・診察して臨床情報を収集していること、そして全死亡例の約80%を剖検して死因・臓器病変を検索していることなど、徹底した調査が行われていることである。

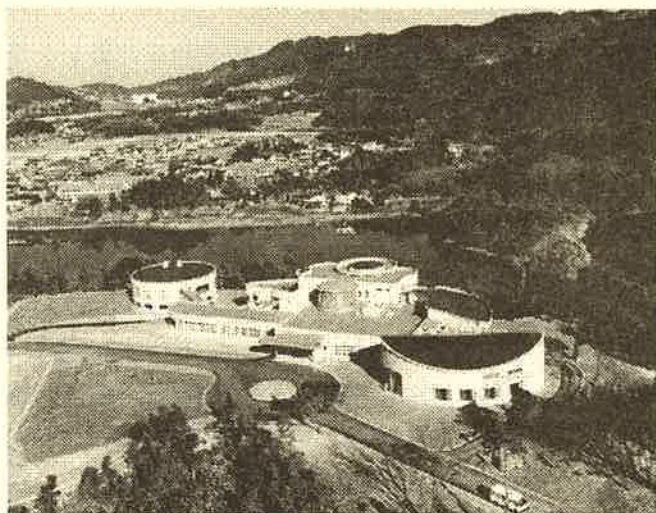
長い研究期間中に、研究テーマも当初の脳卒中から、虚血性心疾患、腎疾患、悪性腫瘍(胃癌)、老年期認知症、眼疾患、歯科疾患、高血圧、糖尿病、脂質代謝異常、肥満、メタボリックシンドローム、生活習慣(飲酒、喫煙、食事性因子、運動)など生活習慣全般に広がった。悪性腫瘍については、膨大なデータが蓄積されたまま埋もれていたが、飯田教授が就任してその掘り起こしが行われるようになった。とくに胃癌に関する解析が行われるようになり、時代の異なる追跡集団の成績を比較し胃癌発症率および死亡率の時代的推移に関する成績が発表された。とくに1988年に創設した第3集団では、胃癌発症者の生命予後や、ヘリコバクターピロリ菌感染をはじめとする危険因子が胃癌発症に与える影響をコホート研究のスタイルで分析している。

2002年に、文部科学省の大型の競争的研究資金を獲得して、久山町のゲノム疫学研究が本格的に開始された。この大型プロジェクトは、九州大学および東京大学医科学研究所など7つの大学・研究機関とIT産業の最大手やゲノムのベンチャー会社が参加する産官学の共同研究で、文部科学省のリーディングプロジェクトに指定されている。このプロジェクトでは、久山町研究の臨床・剖検記録と遺伝子情報を一元化したデータベースを構築し、さらにそれを基に遺伝子情報と生活習慣病の関係を解析して、テーラーメイド医療・予防の実現を図ることを目的としている。現在のところ、脳梗塞の関連遺伝子の探索が主な研究課題となっている。このプロジェクトが始まると同時に、久山町にゲノム疫学の基盤を作るために40歳以上の全住民を対象とした健診を行ったが、対象住民の約80%にあたる3,300名以上の方々に健診を受診していただいた。さらに、40歳未満の若い住民が500名近くもゲノム研究に興味を持って健診に参加してくださ

た。この健診では、従来の健診項目に加えて、75g 経口糖負荷試験とともに詳細な栄養調査と身体活動調査をほぼ全員に行い、これまでの健診にはない幅広い生活習慣に関連する情報が得られている。この健診では、ゲノム研究のインフォームドコンセントの承諾率は 96%、疫学調査の承諾率は 99%に達した。

久山町研究では、住民の疫学・臨床・ゲノム情報は住民に帰属し、大学はそれを研究に活用させていただくという立場にある。そこで住民の情報を町と共同管理するために、ゲノムプロジェクトの開始にともない大学の研究室は久山町の健診施設である久山町ヘルス C (Check) & C (Care)センター内に移転した。これにより研究スタッフと住民との交流が深まり、両者の信頼関係がさらに向上している。

わが国では職域健診が普及し、住民健診の受診率が軒並み低下している。2002 年の健診受診者は久山町研究の新しい第 4 集団となったが、現代人の生活習慣病について実態に即した正確な情報を提供する、わが国では極めて数少ない地域住民の疫学集団の一つであろう。この第 4 集団は、追跡調査のデータが蓄積されることにより、今後長期にわたり久山町研究を支える新たな集団になると期待される。



現在研究室がある久山町 C&C センター

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

平成 18 年度 日本がん疫学研究会幹事会議事録要旨

日 時:2006 年 5 月 19 日

場 所:広島プリンスホテル 2F 会議室“左近”

出席者:森、本荘、山口、祖父江、濱島ちさと、津金、井上、味木、溝上、岡本、永田、浜島信之、菊地、田島、渡邊、石川、津熊、竹下、中地、清水、古野、田中、秋葉 (以上幹事 23 名)

事務局:山内

欠席者:岸、辻、坪野、玉腰、若井、森本、今井、嶽崎

[議事録要旨]

幹事会冒頭で海外顧問会員の Dr. Robert W. Miller と特別会員の村田紀先生がこの春に逝去されたとの報告があった(総会の冒頭にて報告、黙祷)。

1. 庶務報告(庶務担当幹事:田島)

- 1) 会員数:2006 年 5 月 1 日現在で会員数は 243 人、うち海外顧問 2 人、賛助会員 1 社であった。1990 年以降会員数はやや減少傾向にある。
- 2) NEWS CAST の発行:主編集者岡本幹事、副編集者井上幹事により No.82 から No.84 までの 3 号が発刊され、No.85 は 5 月末までに発刊予定。
- 3) 会計報告:平成 17 年度の会計収支報告が行われ、永田監事からの監査報告後、承認された。続いて平成 19 年度予算案についても承認された(総会にて承認)。

2. 役員等の一部改選(代表幹事:古野)

- 1) 代表幹事の改選:2006 年 6 月 30 日付けで 2 年の任期満了となる古野幹事に替わり 5 名の推薦候補を含め合計 7 名の記名選挙の結果、山口幹事が過半数の得票で選ばれた(総会にて承認)。



第65回日本癌学会学術総会のご案内

- 2) 特別会員の推薦: 今回の任期満了に伴い改選対象の森本幹事が推薦された(総会にて承認)。
- 3) 幹事の改選: 2006年6月30日付けで13名の幹事が任期満了となる。但し、森本幹事が特別会員に推薦されたため改選対象は12名となり全員再選され、森本幹事の補充として田中英夫会員が新幹事として選出された(総会にて承認)。
- 4) 監事の依嘱: 任期満了となった永田監事の後任には田中恵太郎幹事が本人の了承のもと依嘱された。
- 5) NEWS CAST 編集者: 岡本直幸幹事の任期が終了し、新編集者として溝上幹事が推薦され承認された。
3. 次々年度の日本がん疫学研究会の会長選出(代表幹事: 古野)

次々年度の研究会(平成20年度に開催予定の第31回)の会長として古野幹事が推薦され承認された。なお、開催については他の研究会と合同開催等を含め詳細は未定である。

4. 次年度の日本がん疫学研究会の開催(次期会長: 山口幹事)

今回の第29回は日本がん分子疫学研究会と初めての合同開催であったが、第30回の学術総会は第14回日本がん予防学会(国立がんセンター研究所: 若林敬二会長)と第8回日本がん分子疫学研究会(順天堂大学: 樋野興夫会長)と初の3会合同で平成19年7月12日、13日の両日に東京都(会場: 学術総合センター)にて開催予定しているとの説明があった。

5. その他

日本がん疫学研究会と日本がん分子疫学研究会は会員や研究報告内容が重複している部分も多いことから将来的には2研究会を一つに合体する方向に持っていくのがよいのではないかなどの意見がでた。

但し、これに関してはそれぞれの研究会の一般会員の意見も広く聞く場を持つことを含め、今後じっくり話し合い、協議する必要があるということになった。

大会テーマ	がんの罹患率と死亡率の激減を目指して			
大会長	垣添 忠生(国立がんセンター総長)			
主催	第65回日本癌学会学術総会組織委員会 (国立がんセンター内)日本癌学会			
開催期間	学術集会	平成18年9月28日(木) ～30日(土)		
	市民公開講座	平成18年9月30日(土)午後		
	理事会	平成18年9月27日(水)午後		
	総会・奨励賞他	平成18年9月30日(土)午後		
開催場所	パシフィコ横浜 (会議センター、展示ホールA・B) 〒220-0012 神奈川県横浜市西区みなとみらい1-1-1 電話(045)221-2121 FAX(045)221-2136			
参加費		一般	学生	
	会員	事前登録	12,000円	3,000円
		当日登録	15,000円	4,000円
	非会員	事前登録	23,000円	8,000円
当日登録		25,000円	10,000円	
ホームページ	http://accessbrain.co.jp/cancer2006/			
問い合わせ	運営準備室 〒113-0034 東京都文京区湯島3-31-5 YUSHIMA3315ビル3階 アクセスブレイン内 TEL 03-3839-5032 FAX 03-3839-5035 E-mail cancer2006@accessbrain.co.jp			

予定プログラム

特別企画

シンポジウム

1. JCA-AACR Joint Symposium 「Personalized Medicine in Oncology」

教育セミナー

1. 化学療法の専門医のための3学会(日本癌治療学会・日本臨床腫瘍学会・日本癌学会)合同レクチャー
2. がん専門薬剤師を対象とした化学療法に関するレクチャー「がん専門薬剤師に期待される役割」

特別レクチャー「発見、この魅惑的瞬間」

1. 細胞内物質輸送の分子機構
2. 発生: アクチビン
3. オートファジー研究の展開

パネルディスカッション

がんの罹患率と死亡率の激減を達成するには

その他、モーニングレクチャー17題、シンポジウム29題、一般演題(口演・ポスター)、ランチョンセミナー。



第65回日本公衆衛生学会総会のご案内

テーマ	健康な社会 —安全・安心への公衆衛生からのアプローチ—
学会長	鏡森 定信(富山大学医学部長)
開催期間	平成18年10月25日(水)～27日(金)
会場	富山県民会館・富山国際会議場
ホームページ	http://www.ec-japan.jp/65jsph/
総会事務局	[総括事務局] 富山県厚生部医務課 〒930-8501 富山市新総曲輪1-7 TEL 076-444-3218 FAX 076-444-3495 [学術部会事務局] 富山大学大学院医学薬学研究部保健医学講座 〒930-0194 富山市杉谷2630 TEL 076-434-7272 FAX 076-434-5022 [運営事務局] 株式会社イー・シー 〒930-0037 富山市音羽町2-4-14(株)サウトソニック内 TEL 076-491-9001 FAX 076-491-9006 E-mail 65jsph@ec-inc.co.jp

予定プログラム

学会長講演 10月25日(水)午前

「安全・安心と健康増進に係わる公衆衛生からのアプローチ」
鏡森 定信(富山大学医学部長)

招待講演 10月25日(水)午前

「健康な社会—生活と仕事—(Healthy Society - Living and working conditions)」
マイケル・マーモット卿(ロンドン大学ユニバーシティ・カレッジ疫学公衆衛生学講座教授)
Professor Sir Michael Marmot, University College London

メインシンポジウム 10月25日(水)午後

「安全・安心な社会と公衆衛生」

サテライトシンポジウム 10月25日(水)午後、26日(木)午前・午後、27日(金)午前

- 1) 安全で安心して暮らせるまちづくり
- 2) 安全・安心の保健医療—医療制度改革の目指すべき方向—
- 3) 食の安全
- 4) 災害・事故と公衆衛生活動
- 5) 社会経済的環境による健康の格差
- 6) 小児期の生活習慣と心身の成長
- 7) 住宅と健康・福祉

教育講演 10月26日(木)午前・午後、27日(金)午前

- 1) 経済格差の拡大と社会問題
- 2) ハリケーンカトリナが教えた安全持続都市
- 3) 世界のたばこ政策の潮流と残された課題
- 4) 富山型地域福祉

- 5) 感染症研究の新しい形「新興・再興感染症研究拠点形成プログラム」について
- 6) 予防活動評価のための医療費分析

公衆衛生行政研修フォーラム 10月25日(水)午後、26日(木)午後

- 1) 健康日本21
- 2) 健やか親子21
- 3) 20世紀の公害病
- 4) 介護予防
- 5) 様々な場で働く「保健師」に必要な能力と教育内容の明確化—公衆衛生チームの一員として—



第17回日本疫学会学術総会のご案内

平成19(2007)年1月26日(金)、27日(土)に、財団法人放射線影響研究所主席研究員・疫学部長児玉和紀先生を学会長として広島市南区民文化センターで開催されます。テーマは、「疾病予防・健康増進の実践と疫学」です。また第14回疫学セミナーを1月25日(木)の午後に予定しています。詳細は日本疫学会ホームページ(<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jea/>)で追ってお知らせいたします。

★編集後記★

NEWSCAST 86号をお届けします。今号から、国立がんセンターの井上、国立国際医療センターの溝上で編集を担当することになりました。よろしくお願ひいたします。

今回は、新しく代表幹事に就任された山口先生に巻頭言をお願いしました。また、本年5月19-20日に広島において開催された第29回がん疫学研究会・第7回日本がん分子疫学研究会合同学術集会についての報告記事をいただきました。さらに本号のコホート便りでは、近年がんに関する疫学研究を活発に発表されている久山町コホートについてご紹介いただきました。ご寄稿の先生方には、お忙しいにもかかわらず快くお引き受けいただき、ありがとうございました。(井上)

疫学の西の“流行地”のひとつ、九州大学から東京に参りました。山口新代表幹事も巻頭言で述べられていますが、このニュースレターを通じて疫学研究の実践に携わる研究者の“思い入れ”や“意気込み”がお伝えできれば幸いです。久山町のゲノムコホート研究については、長い歳月をかけ地域住民との間に築いた信頼関係を基盤に展開されている様子が伺え、社会とともに歩む疫学研究の姿が浮かび上がってきます。(溝上)